

2025年 生誕150年のクライスラー / 沖澤のどか ポストン響デビュー
回 顧 生誕100年のブーレーズ

プログラム

今年も残すところ1ヶ月を切り、最後のCDコンサートとなりました。今回は2025年を回顧するというプログラムで、アニバーサリーイヤーでご紹介できなかったクライスラーとブーレーズ、快進撃を続ける沖澤のどかが名門ポストン交響楽団に初めて客演した11月の演奏をお送りして、今年を締めくくりたいと思います。

フリッツ・クライスラー (1875.2.2~1962.1.29) はウィーン生まれ。幼少から、開業医でアマチュア音楽家の父から音楽の手ほどきを受け、7歳でウィーン音楽院に入り、アウアーとヘルメスベルガーに師事。その後パリ音楽院でヴァイオリンをマサール、作曲をドリブに学びました。1887年ヴァイオリン・コンクールで優勝しますが、その後軍隊に入り、楽界に復帰したのは1899年でした。復帰演奏会は非常な賞賛を受け、翌1900年にアメリカに楽旅、1902年にはロンドンでも演奏会を開きました。1915年にアメリカへ移住してニューヨークを拠点に世界各国を楽旅し、日本にも1923年来日しました。クライスラーは20世紀前半を代表する大ヴァイオリニストでしたが、同時にたくさんのヴァイオリンのための小曲を作曲し、その多くは名曲として広く親しまれています。またベートーヴェンやブラームスのヴァイオリン協奏曲のカデンツァの作曲でも知られています。**ピエール・ブーレーズ (1925.3.26~2016.1.5)** はフランス、モンブリゾン生まれ。パリ音楽院で作曲をメシアン、ルネ・レイボヴィッツに師事。1940年代から頭角を現し、ピアノ・ソナタ第2番、1950年代には「ル・マルト・サン・メートル」等の初期の代表作が生まれました。指揮者としては1946年からパリのマリニー劇場に所属し、活動するとともに1955年にその後援で、「ドメヌ・ミュージカル」というコンサート・シリーズを創設、その指揮にあたりました。1959年南西ドイツ放送交響楽団の常任指揮者。1966年から1970年にはパイロイトで「ニーベルングの指輪」を指揮して大きな話題を呼びました。1971年から1977年までニューヨーク・フィルの音楽監督、1971年から1975年までBBC交響楽団の首席指揮者を歴任。1976年から1980年には再びパイロイトに登場。1976年には自ら、現代音楽に特化した室内オーケストラ、「アンサンブル・アルテルコンタンポラン」を創設し、その後1990年以降はウィーン・フィルやベルリン・フィル、シカゴ交響楽団、パリ管弦楽団等、世界の一流オーケストラを指揮して存在感を示しました。1995年に東京で開催された「ブーレーズ・フェスティバル」では、ロンドン響、シカゴ響、NHK響などを柔軟な表現力で指揮し、強い印象を残しました。

1987年青森県、三沢市生まれの沖澤のどかは、2019年、第56回ブザンソン国際指揮者コンクールで優勝後、キリル・ペトレンコの助手として研鑽を積み、2023年4月より京都市交響楽団の第14代常任指揮者に就任。2024年よりセイジ・オザワ松本フェスティバルの首席客演指揮者に就任しました。今年は6月に初共演の東京都交響楽団と「春の祭典」で圧倒的な名演を披露しましたが、11月には名門ポストン交響楽団にデビューするなど、快進撃を続けています。(中川)

フリッツ・クライスラー (1875~1962) :
美しきロスマリン

フリッツ・クライスラー (Vn) / フランツ・ルツプ (p) (1938年録音 自作自演)

ギドン・クレメル (Vn) / マルタ・アルゲリッチ (p) (1994.11.6 サントリーホールでのLive)

レチタティーヴォとスケルツォ・カプリース

ギル・シャハム (Vn)

(1997.6.28 王子ホールでのLive)

ウィーン奇想曲

ヴォルフガング・シュナイダーハン (Vn) / ブリジット・アンジェレル (p)

(1982.5.8 ベルリン・フィルハーモニーホールでのLive)

愛の悲しみ / 愛の喜び

シュロモ・ミンツ (Vn) / ズービン・メータ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1993.10.16 ウィーン、ロナッヒャー劇場でのLive)

アルノルト・シェーンベルク (1874~1951) :

清められた夜(浄夜) Op. 4

ピエール・ブーレーズ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団

(1999.10.17 ウィーン・ムジークフェラインサールでのLive)

*** 休憩 ***

アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904) :

ヴァイオリン協奏曲イ短調 Op. 53 ~ 第3楽章

五嶋みどり (Vn) / 沖澤のどか指揮ポストン交響楽団

交響曲第7番ニ短調 Op. 70

沖澤のどか指揮ポストン交響楽団

(2025.11.8 ポストン・シンフォニーホールでのLive)

曲 目 解 説

クライスラー：美しきロスマリン／レチタティーヴォとスケルツォ・カプリース ウィーン奇想曲／愛の悲しみ／愛の喜び

フリッツ・クライスラーが作曲した作品には、弦楽四重奏曲、2曲のオペレッタなどありますが、大半はヴァイオリンとピアノのための小曲で、24曲の他、他の作曲家の名を付けて発表した作品が20曲、他の作曲家の作品の編曲が80曲以上あります。1910年頃に作曲された「美しきロスマリン」、「愛の悲しみ」、「愛の喜び」の3曲は、「古いウィーンの舞曲集」としてまとめられ、クライスラーの小品の中で最も親しまれている作品です。「美しきロスマリン」のロスマリン(ローズマリー)は香り高い花を咲かせる「まんねんろう」という草花のことで、ドイツでは愛らしい女性の愛称に使われています。ウィーンのワルツのリズムを用いた「愛の悲しみ」は、感傷的で、しっとりとした情緒を持ち、「愛の喜び」もウィーンのワルツのスタイルの作品ですが、こちらは明るく、楽し気な躍動感があります。「レチタティーヴォとスケルツォ・カプリース」は、ヴァイオリン独奏のための作品で、2つの部分からなり、レチタティーヴォは、「語る、話すように」といった意味で、スケルツォには、「おどける、いたずら」といった意味があります。曲は後期バロックのイタリアのヴァイオリン音楽に近いスタイルを感じさせますが、多彩なヴァイオリン奏法が要求され、ユーモアとドラマ性を持ち合わせたクライスラーの幅広い表現力に魅了される作品です。ウィーンで生まれ、ウィーンで育ったクライスラーが1910年頃に作曲した「ウィーン奇想曲」は、ウィーンの伝統的な大衆音楽である「シュランメル音楽」の雰囲気を取り入れ、優雅なワルツの情感を生かしながら、技巧的な即興性を加味した名曲です。

シェーンベルク：清められた夜(浄夜) 作品4

ウィーンで生まれたシェーンベルクは、8歳の頃からヴァイオリンとチェロを学びますが、15歳のときに父を失い、家計が豊ではなかったため、十分な音楽教育を受けることができませんでした。しかし、独学で多くのことを覚え、1894年、20歳の時にツェムリンスキーから数カ月、対位法のレッスンを受けた事が、唯一の正規の音楽教育でした。ヴァイオリンやチェロを演奏して友人と室内楽を行ない、そのための作品を多く書いたことは、後年の発展の基礎となりました。1908年頃までの作品は、後期ロマン派的色彩の濃いものでしたが、その後、一定の調性の枠内からはみ出した「無調」の技法を使い始め、さらに7つの音に縛られている調性の枠を捨て、12の音をいっそう自由に用いる「12音技法」と呼ばれる革新的な音楽語法を確立しました。シェーンベルクの弟子であったアルバン・ベルク、アントン・ウェーベルンを加えたグループは「新ウィーン学派」と呼ばれています。「清められた夜」は、弦楽六重奏曲として25歳の1899年の12月に完成、1902年の3月18日にウィーンで初演されました。1917年に自ら弦楽合奏用に編曲、現在ではこちらの版での演奏が多くなっています。この曲はドイツの詩人リヒャルト・デーメル「女の世界」という詩集に基づいていますが、「月夜の木立を愛する男女が歩きながら、すでに子を宿していると告白しながら、それを後悔していると告げる女と、自分の子として産んでくれ、と深い愛情を示す男が、相抱き、また歩みを進めて行く」という標題音楽になっています。和声の書法は後期ロマン派ですが、調性や対位法はシェーンベルク独自の様式で、シェーンベルクの代表作のひとつとして広く知られている名曲です。

ドヴォルザーク：交響曲第7番ニ短調作品70

1841年9月8日にチェコのネラホゼヴェスで生まれたアントニン・ドヴォルザークは、生涯9曲の交響曲を残しましたが、生前に出版されたのは第5番以後の5曲で、その後残りの4曲が出版され、年代順に整理されたため、昔第2番と言われていた交響曲が第7番、第5番は第9番「新世界から」になりました。1884年から1896年の間ドヴォルザークは、9回に渡ってイギリスを訪れ、親愛な関係を築きますが、この時ロンドンのフィルハーモニック協会から交響曲の作曲とその初演指揮の委嘱を受け、完成したのが交響曲第7番ニ短調です。1884年12月に着手、1885年3月に完成し、同年4月22日ドヴォルザークの指揮で初演され大成功を収めました。彼はこの作品を手掛ける前にブラームスの交響曲第3番を知り、これに大いに啓発され、創作意欲を掻き立てられたといわれています。チェコ固有の音楽的要素と西ヨーロッパの技法を巧妙に融合させ、真に国民主義の音楽家として大成する、その第一歩となる作品です。これまでになかった悲劇的な気分と劇的效果、それにチェコ舞曲を取り入れるなどドヴォルザークの個性がすみずみまで表現された名曲です。

第1楽章 アレグロ・マエストーソ

第2楽章 ポコ・アダージョ

第3楽章 スケルツォ、ヴィヴァーチェ

第4楽章 フィナーレ、アレグロ

ドヴォルザーク：ヴァイオリン協奏曲ニ短調作品53

ドヴォルザークは、1878年、ハンガリーの高名なヴァイオリニスト、ヨーゼフ・ヨアヒムと出会い、協奏曲の作曲を思い立ち、翌1879年、唯一のヴァイオリン協奏曲ニ短調を作曲しました。1880年に改訂され、初演は1883年、チェコのフランティシェク・オンドジークの独奏でプラハで初演されました。技巧的なソロ・パートにシンフォニックなオーケストラが溶け合い、スラヴ的色彩の強い名曲です。

第1楽章 アレグロ・マ・ノントロッポ 第2楽章 アダージョ・マ・ノントロッポ

第3楽章 アレグロ・ジョコーソ・マ・ノントロッポ